研究ノート

# 医療系専門職大学の教育的特徴の何がOT/PTを目指す学生の成長に影響を与えるのか

## ― 東京保健医療専門職大学（TPU）の第１期生と２期生に対するアンケート調査による検討 ―


小野寺　哲　夫[1)]　畠　山　久　司[1)]　武　井　圭　一[2)]
大　塚　幸　永[2)]　森　本　晃　司[2)]　江　幡　真　史[2)]

1) 東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部作業療法学科
2) 東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部理学療法学科


# On factors of educational characteristics of professional university affecting the acquisition and growth of students pursuing OT / PT.

## ― Questionnaire survey of the first and second year students of the Tokyo Professional University of Health Sciences. ―


Onodera Tetsuo[1)]　Hatakeyama Hisashi[1)]　Takei Keiichi[2)]
Ootuka Yukie[2)]　Morimoto Koji[2)]　Ebata Shinji[2)]

1) Department of Occupational Therapy, School of Rehabilitation, Tokyo Professional University of Health Sciences.
2) Department of Physical Therapy, School of Rehabilitation, Tokyo Professional University of Health Sciences.



**Abstract**：The purpose of this study is to clarify how well the first- and second-year students understood and recognized the characteristics of professional universities, specialized courses, and expanded courses, and is also to investigate which of these factors affected students' learning, acquisition and educational effectiveness of this university. The survey subjects were 141 students (PT: 98 and OT: 43) of the first and second years of Tokyo Professional University of Health Sciences, and were conducted using a questionnaire method.

The questionnaire consisted of a face sheet (department, gender, etc.), basic conditions of the university, characteristics of professional universities, specialized courses, expanded courses, quality of lectures, closeness of interpersonal distance, and future vision, and as performance indicators, the degree of mastery of specialized courses and expanded courses (management, organization, inclusive society) were asked.

The results of multiple regression analysis showed that the factors that had a statistically significant positive effect on the educational effect (total) at the professional university were "expanded courses factor", "specialized courses factor", and "future vision factor", and it was suggested that the educational effect of students was enhanced by strengthening and enhancing the contents of these three factors through daily educational practice and curriculum reform.



**Key Words**：Characteristics of Professional University, specialized courses, expanded courses, inclusive society, educational effects



**要旨**：本研究の目的は、本学１期生と２期生を対象に、それらの学生が本学専門職大学の特色や専門科目、展開科目の特徴をどれだけ理解・認知し、それらの要因のどれが、どのように習得度や教育効果に影響しているのかについて検討することである。

調査対象は、第１期生と２期生141名（PT：98 OT：43）で、質問紙法で実施された。質問項目として、大学の基本的条件、専門職大学の特色、専門科目、展開科目、講義のクオリティー、対人距離の近さ、将来像を尋ね、成果指標として、専門科目の習得度、展開科目の習得度について尋ねた。

重回帰分析の結果から、本専門職大学における教育効果（合計）にプラスの有意な影響を与えていた因子は、「展開科目因子」「専門科目因子」「将来像因子」であったことから、この３因子の内容を、日々の教育実践、およびカリキュラム改革等によって強化・充実させることによって、学生の教育効果が高まることが示唆された。

**キーワード**：専門職大学の特色、専門科目、展開科目、共生社会、教育効果

## はじめに

「大学全入時代」、「大学淘汰」という言葉が聞かれるようになって久しく時間が流れた。

若年層人口の低下は、大学間の競争の激化をもたらし、閉鎖・縮小を余儀なくされた大学、もしくは大学の合併など、前世紀には想像もされなかった変革が過去数年で起こり始めている。そのような状況下において、各大学は生き残りをかけて新しい学部の設立、学生サービスの充実、新たな財源の確保等などに代表される様々な改革に取り組み始めている。当然、専門職大学においても重要な課題になることは言うまでもない[2)]。その一連の改革の中で、日本の大学関係者の注目を集め始めているものにInstitutional Research（以下 IR）がある[1)]。アメリカで IR の現場で仕事をしてきた柳浦猛[4)]によると、IR は、簡単に言えば、企業でいうところの情報戦略室であり、大学の運営に役立つ情報を提供する役割を担う機能であり、アメリカやカナダではほとんど全ての大学に設置されている部署であるとしている。

日本では、まだIRは十分普及している状況ではないが、いくつかの大学では、特に2012年９月に、同志社大学・北海道大学・大阪府立大学・甲南大学の４大学に加えて、お茶の水女子大学・琉球大学・玉川大学・関西学院大学を加えた、８大学によって任意団体「大学 IR コンソーシアム[5)]」が設立され、さらに2018年４月、非営利型の一般社団法人として大学IRコンソーシアムとして、学生調査分析を軸とする IR 機能の開発を基盤として、IR を通じた会員間での相互評価の結果を学士課程教育の質的向上に結びつける質保証システムの創出と全国規模の IR コミュニティの育成を目的として設立された（2022年６月27日現在、全国の国公私立62大学が加盟。国立８大学、公立９大学、私立47大学）[5)]。

## １　IR の定義について

ではIRとは何か？まず、Institutional Researchの本質を的確にあらわした定義がなければ、IRは全国の大学には普及しないだろう。しかし、現時点では、IR の定義も日本語訳も、いずれも存在しないというのが現状である[4)]。

では、アメリカにおいてはどうだろうか。柳浦[4)]によると、IR の定義に関しては、アメリカにおいても様々な意見が存在している[5)6)7)]のであるが、IRの全国協会である Association for Institutional Research（以下 AIR）は、IR を“（組織としての）大学の理解、戦略、運営の改善につながる研究（research leading to improved understanding, planning and operating of institutions of postsecondary education）”と定義している。しかし、この定義が必ずしも IR の現状を示しきっているとは言い難いという意見ももちろんある[7)]。それは、IR の役割が組織によって大いに異なるからという背景がある。

では、IR の仕事は何だろうか？柳浦[4)]によると、以下のサイクル、すなわち、①データを集め、②分析・研究し、③文書にまとめ、④首脳陣に提言を行い、そして⑤その提言を実行に移すというのがIRの簡単なサイクルであるとする。そしてこのフィードバックシステムをいかに効率化し、スピーディーに回していくか、これに尽きるといえる。

## ２　学生調査について

高橋ら[1)3)]は、学習者中心の教育への転換が図られ、データを用いてその質保証をしていくためには、教育情報の収集・分析が必須となるが、そのためには従来の成績評価のデータだけでは不十分であ

り、学生調査等が重要であることを指摘している。

大学IRコンソーシアムにおいて実施されている学生調査は、学習プロセスの間接アセスメントとして利用できる。学生の学習行動や学習時間、能力に関する自己評価、満足度を中心とした調査項目が含まれており、学生自身が大学での学びをどのように受けとめて、どのように評価しているのかを調べている[5)]。これらの調査項目は、米国の大学生調査NSSE（National Survey of Student Engagement）やCIRP（Cooperative Institutional Research Program）をモデルとしており、大学IRコンソーシアム会員校が共通の調査項目で実施するため、ベンチマーク可能な標準調査として位置づけることができ、また学生調査の結果をコンソーシアム会員校全体と比較することで、各大学の特徴を見出すこともできる。さらに、学生調査を継続することで、学生の経年変化や成長を調べることや学内にある教学データとリンクさせることで、学習成果に関する直接アセスメントと、学生調査から得られる学習プロセスを組み合わせて分析することもできる[5)]。

このように学生調査を教育アセスメントとして用いることで、各大学における教育の標準性を検証することや特色を抽出することにつながり、アセスメントの結果は、教学マネジメントの支援や教育の内部質保証のエビデンスとしても役立てられるとしている[5)]。

### 3　本調査における問題関心と研究課題

大学IRコンソーシアムにおいて実施されている学生調査[5)]やその他の大学で独自に実施されている学生調査[9)10)11)]に基づき、専門職大学（現時点では、大学IRコンソーシアム会員校には専門職大学は入っていない）の特色を適切に反映できる学生調査項目の作成を行った。その上で、以下の問題意識に基づいて、調査を行った。

①医療系専門職大学である本学の入学者に対して専門職大学の特色がどのように認識されているのかを調査することにより、新たな教育機関として設置された医療系専門職大学に対する社会的ニーズ、期待されている機能を明らかにすること

②本学の特徴に対して学生が抱く魅力度（満足度）を明らかにすること

③各学年における魅力度、および習得度等の変化を把握し、それらの知見を、今後の医療系専門職大学のカリキュラム設計等に活用するべく有用な資料を作成すること

## 目　的

本研究の目的は、本学1期生と2期生を対象に、それらの学生が本学専門職大学の特色や専門科目、展開科目の特徴を、どれだけ理解・認知し、それらの要因のどれが、どのように習得度、および教育効果に影響しているのかについて検討することである。

## 方　法

**【調査協力者】**

東京保健医療専門職大学の第1期生と2期生141名（男子：80名、女子：57名、回答拒否：4名）、所属学科：PT：98名、OT：43名）

**【質問紙法（リッカート6件法：45項目)】**

フェイスシート（所属学科、性別、通学時間など4項目）、中心的質問項目（37項目）として、大学の基本的条件、専門職大学の特色、専門科目、展開科目、講義のクオリティー、対人距離の近さ、将来像を尋ね、成果指標として、専門科目の習得度、展開科目の習得度（経営・組織マネジメント、共生社会）についても尋ねた。

**【手続き】**

本研究は、本学の全学生（1年・2年性）を対象としているが、本研究への参加に関しては自由参加とし、研究者が研究概要を記した説明書をもとに口頭で説明し、同意書・同意撤回書への署名と本質問紙への回答をしてもらった（インフォームドコンセント）。

なお、本研究は、東京保健医療専門職大学の研究倫理審査委員会において承認されている。（倫理審査番号：TPU-21-031）

## 結　果

〈因子作成方法〉

質問項目に関して統計的検討を行うため、探索的因子分析を行ったところ、8因子にまとまったが、

各因子項目を詳細に検討した結果、潜在因子名を付与することが困難であることが明らかになった。そこで、共同研究グループ（５名）は、37項目を１項目ずつ検討を繰り返し、内容的妥当性を担保した上で、最終的に10因子にまとまった。具体的には、①大学の基本的条件因子、②専門職大学の特色因子、③専門科目因子、④展開科目因子、⑤対人距離因子、⑥講義のクオリティー因子、⑦将来像因子、成果指標因子として、①専門科目の習得度因子、②展開科目の習得度因子：経営・組織論、③展開科目の習得度因子：共生社会の10因子である（各因子の具体的な項目内容については、付録Ⅰに示した）

全体データにおける将来像因子（項目例：「将来、誇りを持った理学療法士／作業療法士になりたいと思う」「理想の理学療法士／作業療法士像がある」「将来、共生社会の実現と発展に貢献できる実務リーダーを目指したいと思う」）の高低２群間における各因子の平均値についての対応のない *t* 検定を行った。その結果、多くの因子において有意差が認められた（表１）。

表１より、将来像因子高群においては、将来像因子低群と比べて、「専門職大学の特色因子」や「専門科目因子」「講義のクオリティー因子」などの大学教育に関連する因子においては、より肯定的に評価し、「専門科目の習得度」や「展開科目の習得度」などの教育効果の側面においては、より高い成果を示した。

全体データにおいて、①大学の基本的条件因子、②専門職大学の特色因子、③専門科目因子、④展開科目因子、⑤対人距離（近さ）因子、⑥講義のクオリティー因子、⑦将来像因子を説明変数として、教育効果（合計）を従属変数として、重回帰分析（変数増加法）を行った。その結果、いくつかの因子が教育効果（合計）に統計的に有意なプラスの影響を与えていた（図１）。

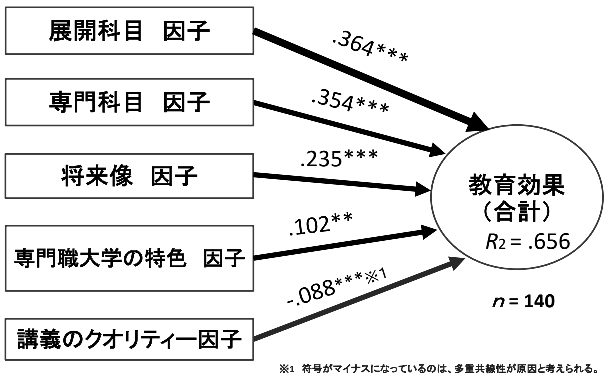


図１　全体データにおける教育効果（合計）への重回帰分析結果

表１　全体データにおける将来像因子の高低２群間における *t* 検定結果

| | 将来像因子 | *N* | 平均値 | 標準偏差 | *t* 値 | 自由度 | 有意確率（両側） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学の基本的条件因子 | 低群 | 29 | 16.72 | 4.13 | 0.022 | 47 | 0.982　n.s. |
| | 高群 | 20 | 16.70 | 3.05 | | | |
| 専門職大学の特色因子 | 低群 | 28 | 18.89 | 3.58 | −2.290 | 46 | 0.027　* |
| | 高群 | 20 | 21.15 | 3.03 | | | |
| 専門科目因子 | 低群 | 29 | 19.83 | 3.45 | −3.474 | 46 | 0.001　*** |
| | 高群 | 19 | 23.32 | 3.32 | | | |
| 展開科目因子 | 低群 | 29 | 6.17 | 2.00 | −1.306 | 47 | 0.198　n.s. |
| | 高群 | 20 | 6.95 | 2.11 | | | |
| 対人距離因子 | 低群 | 29 | 15.93 | 3.58 | −2.202 | 47 | 0.033　* |
| | 高群 | 20 | 18.10 | 3.09 | | | |
| 講義のクオリティー因子 | 低群 | 29 | 6.28 | 1.87 | −3.094 | 47 | 0.003　** |
| | 高群 | 20 | 7.80 | 1.40 | | | |
| 専門科目の習得度 | 低群 | 29 | 15.07 | 2.34 | −2.875 | 46 | 0.006　** |
| | 高群 | 19 | 17.21 | 2.78 | | | |
| 展開科目の習得度①：経営・組織 | 低群 | 29 | 9.86 | 2.05 | −2.719 | 47 | 0.009　** |
| | 高群 | 20 | 11.55 | 2.26 | | | |
| 展開科目の習得度②：共生社会 | 低群 | 29 | 7.00 | 1.41 | −3.569 | 47 | 0.001　*** |
| | 高群 | 20 | 8.55 | 1.61 | | | |
| TOTAL10　教育効果（合計） | 低群 | 29 | 31.93 | 4.43 | −3.774 | 46 | 0.000　*** |
| | 高群 | 19 | 37.37 | 5.51 | | | |

※1　* $p < .05$,　** $p < .01$,　*** $p < .001$

図１より、教育効果（合計）に有意なプラスの影響を与えていたのは、影響の大きかった順に、展開科目因子（$\beta$＝.364）、専門科目因子（$\beta$＝.354）、将来像因子（$\beta$＝.235）、専門職大学の特色因子（$\beta$＝.102）で、マイナスの影響を与えていたのが講義のクオリティー因子（$\beta$＝-.088）であった（$R_2$＝.656）。

ここで、講義のクオリティー因子が教育効果（合計）に対して、マイナスの影響を与えていたのは、各因子間に比較的高い相関関係が認められていたことから、「多重共線性」が原因であると推測される。したがって、実際は、講義のクオリティー因子は教育効果（合計）に対してプラスの影響を与えていると考えられる。

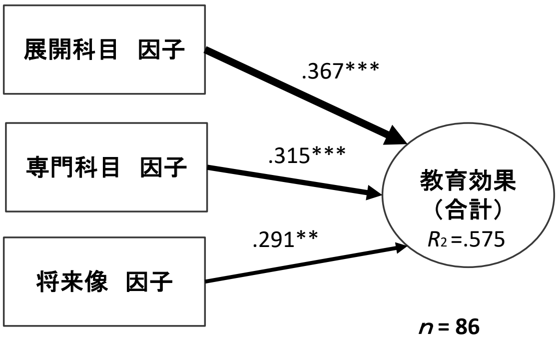


図２　１学年データにおける教育効果（合計）への重回帰分析結果

１学年のデータにおいて、同様の重回帰分析を行った。その結果、教育効果（合計）に有意なプラスの影響を与えていたのは、影響の大きかった順に、展開科目因子（$\beta$＝.367）、専門科目因子（$\beta$＝.315）、将来像因子（$\beta$＝.291）であった（$R_2$＝.575）（図２）。

２学年のデータにおいても、同様の重回帰分析を行った結果、教育効果（合計）に有意なプラスの影響を与えていたのは、１学年データにおける結果とは一部異なり、影響の大きかった順に、専門科目因子（$\beta$＝.425）、展開科目因子（$\beta$＝.372）、将来像因子（$\beta$＝.241）であった（$R_2$＝.635）（図３）。

## 考　察

本調査において行われた将来像因子の高低２群間における対応のない $t$ 検定による比較により、将来像因子（「将来、誇りを持った理学療法士／作業療法士になりたいと思う」「理想の理学療法士／作業療法士像がある」「将来、共生社会の実現と発展に貢献できる実務リーダーを目指したいと思う」）といった高い志を持っている群ほど、そのような志を持っていない群と比べて、教育成果が有意に高いことが示されたことから、本学が目指す医療専門職としての高い志、高い意識を持った人材育成という方向性が効果的であることが示唆された。

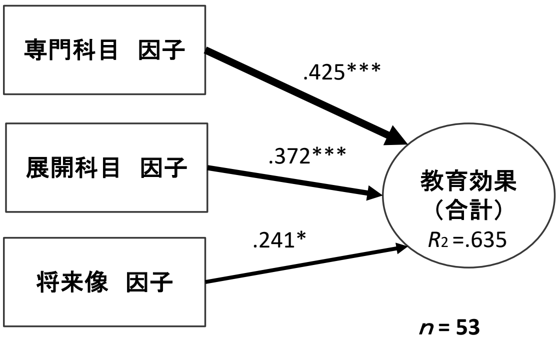


図３　２学年データにおける教育効果（合計）への重回帰分析結果

重回帰分析においては、教育効果（合計）に統計的に有意なプラスの影響を与えていた因子は、「展開科目因子」「専門科目因子」「将来像因子」、および「専門職大学の特色因子」であったことから、この４因子の内容を、IRの取り組み、およびカリキュラム改革等によって強化・充実させることによって、本学（専門職大学）における全体的な教育効果も高まることが示唆された。

## 結　論

大学IRコンソーシアムを中心にして、IRの取り組みが全国の大学に広まりつつある中で、専門職大学として、IRを意識して学生調査等の取り組み、および実践を行っている大学は、東京保健医療専門職大学しかない（2023年１月10日時点）。したがって、このような学生調査に関する研究を継続していくことにより、学生の経年変化や成長を調べることや、将来的には学内にある教学データとリンクさせることで、学習成果に関する直接アセスメントと学生調査から得られる学習プロセスを組み合わせて分析することなども行っていくことによって、より本専門職大学の社会的価値や魅力、および学生満足度等を向上させていけるのではないかと思われる。

## 謝　辞

本研究は、東京保健医療専門職大学における学内共同研究費から助成を受けた。ここに謝意を表する。


**利益相反（COI）**：本研究において開示すべき COI はない。

## 引用文献


1）高橋哲也、星野聡孝他（2014）「学生調査と e ポートフォリオならびに成績情報の分析について：大阪府立大学の教学 IR 実践から」『京都大学高等教育研究』第20号。

2）金子元久（2017）「「専門職大学」の意味するもの」『日本労働研究雑誌』第687号、4-13頁。

3）嶌田敏行、太田寛行（2021）「ディプロマ・ポリシー達成度に注目した学修成果の把握について：茨城大学における入口から出口までの追跡結果から」『情報誌　大学評価と IR』第12号。

4）柳浦猛（2009）「アメリカの Institutional Research とはなにか？」『国立大学財務・経営センター研究報告』第11号、220-253頁。

5）一般財団法人大学 IR コンソーシアム（URL：https://irnw.jp/investigate.　閲覧日：2023年１月10日）。

6）Volkwein, J., F.（2008）The Foundations and Evolution of Institutional Research. *New Directions for Higher Education*, No. 141, Spring（America）.

7）Peterson, M.W.（1990）The Role of Institutional Research: From Improvement to Redesign. *New Directions for Institutional Research*. No.104, Winter（America）.

8）Volkwein, F.（1999）The Four Faces of Institutional Research. *New Directions for Institutional Research*, No.104, Winter,（America）.

9）新潟大学：学修成果検証アンケート報告書（URL：https://www.iess.niigata-u.ac.jp/pdf/questionnaire_H27-29.pdf.　閲覧日：2021年12月20日）.

10）横浜商科大学 IR 委員会：学生調査報告書 ― 2017年度調査 ―（URL：https://www.shodai.ac.jp/gm/ir/2020qclasseva.pdf.　閲覧日：2021年12月20日）.

11）日本大学：学修成果検証アンケート報告書（URL：https://www.nihon-u.ac.jp/uploads/files/20211005113819.pdf.　閲覧日：2021年12月20日）.


## 付録１

### 【大学１】大学の基本的条件因子

Q５　大学の立地が良いと思う.

Q６　通学時間が短いと思う.

Q７　学費が安いと思う.

Q11　学士（専門職）が取得できる.

Q13　専門教育を受けるための設備が整っていると思う.

### 【大学２】専門職大学の特色因子

Q21　学内での実習時間（学内での演習授業など）が多いので実践力が身につくと思う.

Q22　学外での実習時間（学外での臨地実務実習など）が多いので実践力が身につくと思う.

Q25　少人数制の授業であるため教員から多くを学ぶことができていると思う.

Q26　実務家教員が多いため実践的な指導を受けられていると思う.

Q31　知識と技術を関連付けて学ぶことができていると思う.

### 【大学３】専門科目因子

Q16　誇りを持った理学療法士／作業療法士になるための専門教育が受けられていると思う.

Q17　理学療法士／作業療法士の活躍できる分野を幅広く学ぶことができていると思う.

Q20　研究方法を学ぶことができていると思う.

Q23　理学療法士／作業療法士の国家資格を取るための科目が整っていると思う.

Q24　誇りを持った理学療法士／作業療法士になるための科目が整っていると思う.

### 【大学４】展開科目因子

Q32　大学と産業（企業等）が連携した教育を受けられていると思う.

Q33　大学で学びながら産業界や地域社会との連携が行えていると思う.

### 【大学５】対人距離因子

Q12　教員の対応がきめ細やかだと思う.

Q35　教員と学生の距離が近いのでコミュニケーションをとりやすいと思う.

Q36　職員と学生の距離が近いのでコミュニケーションをとりやすいと思う.

Q37　学生同士の距離が近いと思う.

### 【大学教員】講義のクオリティー因子

Q９　講義が楽しいと思う.

Q10　学ぶ意欲が高まる講義であると思う.

### 【学生】将来像因子

Q14　将来、理学療法士／作業療法士の国家資格を取得したいと思う.

Q15　将来、誇りを持った理学療法士／作業療法士になりたいと思う.

Q18　理想の理学療法士／作業療法士像がある.

Q34　将来、共生社会の実現と発展に貢献できる実務リーダーを目指したいと思う.

Q38　医療・福祉以外の分野でも通用する人間になれると思う.

**【成果指標】専門科目の習得度因子**

Q19　自分の理想の理学療法士／作業療法士像に近づけていると思う.

Q39　理学療法士／作業療法士の職種の役割を理解できていると思う.

Q40　理学療法士／作業療法士としての基本的態度が身についていると思う.

Q28　生活者のQOLの維持向上や健康寿命の延伸について理解していると思う.

**【成果指標】展開科目の習得度因子①：経営・組織論**

Q29　経営について理解していると思う.

Q30　マネジメントについて理解していると思う.

Q42　戦略的な思考を身につけ、組織と人を動かすことの重要性を理解できるようになったと思う.

**【成果指標】展開科目の習得度因子②：共生社会**

Q41　共生社会の知識を職業専門科目と関連づけるようになったと思う.

Q27　共生社会について理解していると思う.

受付日：2023年2月9日